

1.	ペプシノーゲンは、胃酸によって、タンパク質を消化する酵素であるペプシンとなり、胃酸とともに胃液として働く。
2.	肝臓は、必須アミノ酸を生合成している。
3.	肺は胸部の左右両側に1対あり、肺の筋組織を収縮・弛緩することにより呼吸運動が行われる。
4.	赤血球は、中央部がくぼんだ円盤状の細胞で、血液全体の約40%を占めている。
5.	小さな子供は、耳管が太く短くて、走行が水平に近いので、鼻腔からウイルスや細菌が侵入して感染が起こりやすい。
6.	骨格筋は、自分の意識どおりに動かすことができる随意筋である。
7.	骨格筋は自律神経系で支配されるのに対して、平滑筋及び心筋は体性神経系に支配されている。
8.	小児は、血液脳関門が未発達であるため、循環血液中に移行した医薬品の成分が脳の組織に達しにくい。
9.	医薬品の経口投与後、消化管で吸収された有効成分は、消化管の毛細血管から血液中へ移行し、門脈を経由して肝臓で代謝を受ける。
10.	口腔内崩壊錠は、適切な量の水とともに服用する必要がある剤形であるため、水分摂取が制限されている患者には適さない。
11.	軟膏剤は、油性の基剤で皮膚への刺激が強いため、患部がじゅくじゅくと浸潤している場合は使用を控えるべきである。
12.	皮膚粘膜眼症候群（スティーブンス・ジョンソン症候群）は原因医薬品の使用開始後2週間以内に発症することがほとんどで、1ヶ月以上経過した後に発症することはない。
13.	黄疸とは、ビリルビン（黄色色素）が胆汁中へ排出されず血液中に滞留することにより生じる、皮膚や白眼が黄色くなる病態である。
14.	多くの場合、無菌性髄膜炎の発症は急性で、首筋のつっぱりを伴った激しい頭痛、発熱、吐きけ・嘔吐、意識混濁等の症状が現れる。
15.	イレウス様症状は、普段から下痢傾向のある人は、発症のリスクが高い。
16.	喘息は、原因となる医薬品の使用後、短時間（1時間以内）のうちに鼻水・鼻づまりが現れ、続いて咳、喘鳴及び呼吸困難を生じる。
17.	喘息は、合併症を起こさない限り、原因となった医薬品の有効成分が体内から消失すれば症状は寛解する。
18.	接触皮膚炎は、医薬品が触れた皮膚の部分にのみ生じるが、光線過敏症は、医薬品が触れた部分だけでなく、全身へ広がって重篤化する場合がある。
19.	以前に薬疹を起こしたことがある人は、抗体が形成されるため、再び薬疹を生じる可能性は低くなる。
20.	食道は、喉もとから上腹部のみぞおち近くまで続く、直径1～2cmの管状の器官で、消化液の分泌腺はない。
21.	胃は中身が空の状態では扁平に縮んでいるが、食道から内容物が送られてくると、その刺激に反応して胃壁の平滑筋が収縮し、容積が広がる。
22.	アミラーゼは、胃内においてタンパク質を消化する酵素として働く
23.	肝臓は、脂溶性ビタミンであるビタミンAやD等のほか、ビタミンB6やB12等の水溶性ビタミンの貯蔵臓器でもある。
24.	静脈にかかる圧力は比較的高いため、血管壁は動脈よりも厚い。
25.	リンパ液の流れは主に骨格筋の収縮によるものであり、流速は血流に比べて緩やかである。
26.	副腎髄質では、「アドレナリン（エピネフリン）とノルアドレナリン（ノルエピネフリン）」が産生・分泌される。
27.	強膜の充血では白目の部分だけでなく眼瞼の裏側も赤くなる。
28.	内耳は、聴覚器官である蝸牛と、平衡器官である前庭の2つの部分からなり、両方とも内部はリンパ液で満たされている。
29.	メラニン色素は、真皮の最下層にあるメラニン産生細胞（メラノサイト）で産生され、過剰な産生が起こると、シミやそばかすとして沈着する。
30.	気管及び気管支は、副交感神経系が活発になると拡張する。
31.	脳において、血液の循環量は心拍出量の約15%、酸素の消費量は全身の約20%、ブドウ糖の消費量は全身の約25%と多い。
32.	加齢等により皮膚のみずみずしさが低下すると、塗り薬の有効成分が浸潤・拡散しにくくなる。
33.	一般に、消化管からの吸収は、濃度の低い方から高い方へ受動的に拡散していく現象である。

34.	チュアブル錠は、水なしで服用するとゼラチンが喉や食道に貼り付くことがあるため、必ず適切な量の水（又はぬるま湯）とともに服用する。
35.	皮膚粘膜眼症候群の発生頻度は、人口1万人あたり年間1～6人と報告されている。
36.	ショック（アナフィラキシー）は、発症後の進行が非常に速やかな（通常、2時間以内に急変する。）ことが特徴である。
37.	通常、糞便は下行結腸、S状結腸に滞留し、直腸は空になっている。
38.	水晶体は、近くのものを見るときには「丸く厚みが増し」、遠くのものを見るときには「扁平」になる。
39.	膵臓は、弱酸性である膵液を胃へ分泌し、消化を補助する。
40.	偽アルドステロン症とは、体内にカリウムと水が貯留し、体から塩分（ナトリウム）が失われることによって生じる病態である。
41.	汗腺には、腋窩（わきのした）などの毛根部に分布するアポクリン腺と、手のひらなど毛根がないところも含め全身に分布するエクリン腺の二種類がある。
42.	平滑筋は、筋線維を顕微鏡で観察すると横縞模様が見えるので横紋筋とも呼ばれる。
43.	錠剤、カプセル剤等の固形剤の場合、特殊なものを除き、胃で有効成分が溶出するものが大部分である。
44.	多くの有効成分は血液中で血漿タンパク質と結合して複合体を形成しているが、血漿タンパク質との結合は速やかかつ可逆的である。
45.	外用液剤は、軟膏剤やクリーム剤に比べて、患部が乾きにくいという特徴がある。
46.	鼻腔から気管支までの呼気及び吸気の通り道を気道といい、そのうち、咽頭・喉頭までの部分を上気道という。
47.	偽アルドステロン症は、副腎皮質からのアルドステロン分泌が増加することにより生じる。
48.	間質性肺炎は、一般的に、医薬品の使用開始から1～2時間程度で起きることが多い。
49.	単球は、血管壁を通り抜けて組織の中に入り込むことができ、組織の中ではマクロファージ（貪食細胞）と呼ばれる。
50.	肛門周囲には、動脈が細かい網目状に通っていて、肛門周囲の組織がうっ血すると痔の原因となる。

番号	解答	解説(×のみ)
1	○	
2	×	「必須アミノ酸以外のアミノ酸」を生成することができる。
3	×	肺自体には肺を動かす「筋組織がない」ため、自力で膨らんだり縮んだりするのではなく、「横隔膜や肋間筋によって拡張・収縮」して呼吸運動が行われている。
4	○	
5	○	
6	○	
7	×	骨格筋(随意筋)は「体性神経系」で支配されるのに対して、平滑筋及び心筋(不随意筋)は「自律神経系」に支配されている。
8	×	小児は、血液脳関門が未発達であるため、循環血液中に移行した医薬品の成分が脳の組織に達し「やすい」。
9	○	
10	×	口腔内崩壊錠は、口の中の唾液で速やかに溶ける工夫がなされているため、「水なしで服用することができる」。
11	×	軟膏剤は、油性の基剤で皮膚への刺激が弱い。患部がじゅくじゅくと浸潤していても使用できる。
12	×	原因医薬品の使用開始後2週間以内に発症することが多いが、1ヶ月以上経過した後に発症することも「ある」。
13	○	
14	○	
15	×	イレウス様症状は、普段から「便秘」傾向のある人は、発症のリスクが高い。
16	○	
17	○	
18	○	
19	×	薬疹は、アレルギー体質の人や「以前に薬疹を起こしたことがある人で生じやすい」。
20	○	
21	×	胃壁の平滑筋が「弛緩」し、容積が広がる。
22	×	アミラーゼではなく、「ペプシン」。アミラーゼは食物のでんぷんを分解し糖に変化させる。
23	○	
24	×	静脈にかかる圧力は比較的「低い」ため、血管壁は動脈よりも「薄い」。
25	○	
26	○	
27	×	強膜ではなく、「結膜」。強膜の充血は眼瞼の裏側は赤くならず、白目の部分がピンク味を帯びる。
28	○	
29	×	メラニン色素は、「表皮」の最下層にある
30	×	気管及び気管支は、副交感神経系が活発になると「収縮」する。
31	○	
32	○	
33	×	濃度の「高い」方から「低い」方へ受動的に拡散していく現象である。
34	×	記述は、「カプセル剤」の内容。チュアブル錠は、口の中で舐めたり噛み砕いたりして服用する剤形であり、水なしでも服用できる。
35	×	人口「100万人」あたり年間1～6人と報告されている。
36	○	
37	○	
38	○	
39	×	膵臓は、「弱アルカリ性」である膵液を「十二指腸」へ分泌する。
40	×	体内に「塩分(ナトリウム)」と水が貯留し、体から「カリウム」が失われることによって生じる。
41	○	
42	×	「骨格筋」は、筋線維を顕微鏡で観察すると横縞模様が見えるので横紋筋とも呼ばれる。
43	○	
44	○	

45	×	外用液剤は、軟膏剤やクリーム剤に比べて、患部が乾き「やすい」という特徴がある。
46	○	
47	×	副腎皮質からのアルドステロン分泌が「増加していない」にもかかわらず生じる。
48	×	医薬品の使用開始から「1～2週間」程度で起きることが多い。
49	○	
50	×	肛門周囲には、「静脈」が細かい網目状に通っている。